

「出来事」

亡命者たちとの、ゆきずりの会話

二千一年一月二十三日

稲賀 繁美

ハイデルベルクからザールブリュッケンへと引越したのは、西暦二千一年一月十日だった。運送会社の運転手のミニ・バンに荷物もろとも便乗して、アウトバーンを一時間半の旅程である。やや背の低い、がっしりした体格に、赤鼻の敵つい運転手だった。お前は何人だ。日本人か、ほう東洋人だな、と妙なことを言う。それからおもむろに、同志よ、実は自分はイランから来た、と打ち明けた。そういえば、達者なドイツ語ながら、どこか癖があった。いつからドイツに、と問うと、もう十三年になるという。車が雨のなかを高速道路に入った頃である。ぼつりと、イランにはこんな良い道路はない、と口にする。とはいえ、それ以外では、イランは良い国だった、シヤアの頃は、と話が拡がった。ああ、この人もイランイスラーム革命を逃れてドイツに流れて来た、多く

のイラン人亡命者の一人なのか、と思った。

この地域出身の男たちは、且話題が政治となるともう止まらなくなる。それより一月ほどまえにも、ハイデルベルクの場末のペルシア料理店で、似たような経験をしていた。給仕係の主人と、料理そのもので、けっきよく閉店時刻過ぎまで、延々と話し込んでしまった。背も高く驚鼻も堂々たる容貌ながら、実に気さくな好人物だった。話の端々に、亡命の悲哀を漂わせていた。その時も、日本におけるイランの出稼ぎ労働者の待遇から始まって、パハレヴィー朝最後の君主と昭和天皇と、どちらが民衆に好かれていたか、といった話題にまで発展した。一旦始まると執拗な質問責めに、即興で回答をでっちあげる羽目になる。当方の拙いドイツ語では、応対に苦労した。日本人が英語が下手なのは、何故だ、と尋ねてくる。それは、列島の中でしか通用しない働き蟻を量産して、かれらをもっぱら経済労働に専心させ、経済一神教をもち立てるためだ。日本列島外では生存不適応な人間が、「日本人」の定義なのさ、と「迷答」を発明した記憶がある。結局、都合三杯の赤葡萄酒を、ただで奢ってくれた。珍しく話のできるこの遠来の珍客を、よほど引き留めたかったのだろう。

ペルシア式の床屋の政治談義は、止まるところを知らない。浪花節に似たメンタリティーだが、質量が過剰で、仕舞いには、正直なところ、やや辟易させられた。とはいえ、辟易でもしなければ、中年・初老の男に、いまさら

外国語会話の上達などおぼつくまい。だが「会話能力」などといった標語は、空虚な実用主義に染まった、姑息な料簡に過ぎない。こうした出会いでもなければ、耳にすることもない直の体験談が、今目の前で展開されている。そして思わぬ問いの前に、日本語の世界に埋没していた自分の思考回路が、根底から揺るがされる。一期一会。いまが真剣勝負、先送りは許されない。そこに生まれる豊かな緊張感こそは、外国で生活する体験のなかで、何物にも変えられぬ醍醐味といつてよい。もともと濃密な時刻が、今刻まれているのだから。とは言え、このペルシア料理店は、肝腎の料理の出来が今一つで、ついにその後、二度と訪れることはなかった。個人客の日本人は、とても親切なのに、二度と来ない、と店主は零していたが、当方もその観察にさらなる確証を与える結果となった。

さて、今回の運転手氏は、前回のイラン人のおじさんとは、どこかしら勝手が違っていた。もちろん反ホメイニ一派であることは分かるが、先方の政治的立場がいまひとつ掴めない。それで遠回しな、差し障りない質問から、少しずつ外堀を埋めていった。三十分もたったころだろうか、ようやく話が興に乗ってくると、この運転手氏、わき見運転どころか、右横の当方に視線を据え、手はハンドルから離して振り回し、当方の左肩を叩いたりして、雄弁かつ木訥にまくし立て始めた。端正だったドイツ語は、いつしか冠詞も語順もめちゃくちゃの、地金には望まない。イランには帰りたいが、何十年もかかるだろう。宗教のせいだ、すっかり遅れた国になってしまった。なに、ハタミ大統領？改革派がひとりでがんばったって、無駄だ。やがて保守派から追い落とされて、失脚するだろうよ。石油を売りに日本に行ったのも、国連で「文明間の対話」を提案してみせたのも、国内での地盤が弱いからだ。外交で得点を稼ごう、というのだろうか？

もう亡くなった父親は、ペルシア湾で港灣を出入りする船舶の積み荷管理をしていた人らしい。その仕事の関係で、七十年代には多くの日本人と付き合いがあった。それが八十年代には韓国人に変わっていった。どちらももの静かな人たち(19)だったが、とりわけ日本人の船は清潔で、食事の管理も良く、好感を持った。他にこんな国はない。姉妹のひとりも日本人と結婚した、らしい。

だが、今どこに居ると尋ねると、感情は漏らさぬまま、分らない、と答えた。革命の動乱を経て、もう二十年以上、音信不通のままらしい。午前十一時半ごろハイデルベルクを発ったので、昼食代わりに、スタンドで甘い菓子パンとコーラを買ってきてくれて、お前も一緒に食え、という。そして何かを懐かしむような口調で、むかしは父と同席する時には、酒も煙草も慎むのが礼儀だった、などという。もちろん父は、自分が酒や煙草をやっていることは知っていたが、なんだ、まるで儒教国家の韓国のようにではないか、と応じると、だから東洋人のモラ

まるだしになっている。話題がクリスマス休暇に触れたところで、実は自分はキリスト教徒、アルメニア人なのだ、と言いつ出した。それでようやく、なるほど、と合点がいった。

シャーの頃はアルメニア人もイラン人も仲良く一緒に生活していた。それがホメイニーが戻ってきてから、宗教上の理由とかで、一緒に食事を取ることも許されなくなつた。イラン人の友人たちは、自分たちを避けるようになった。もちろんシャーも幾つか失敗は犯したが、それでも予算を国と民衆のために使った。パニサドル、あのパリに亡命した政治家は、そのあたりをよく弁えていた。だが革命になってから、宗教気遣いたちは私腹を肥やし、経済をめちゃくちゃにした。おまけにイラクとの戦争で、子供たちを戦場に送り、死ぬがままにした。おまえは知っているか。正規兵たちは、イラクとの前線には回されず、犬死にしたのは、プロパガンダに騙されて志願した、農村出身の少年兵ばかりだ。そして、おしなべて裕福なアルメニア人は、財産を没収されたうえ、国から無一文で出て行かなくてはならなかった。自分たちも、最初はトルコ、次にブルガリア、ハンガリーと数カ月ごとに渡り歩いて、とうとうドイツに住まいを定めた。それにしても、ドイツ人は怠け者だ。製造業だって、町の清掃だって、レストランだって、働いているのは、皆海外からの出稼ぎだ。まあいい、きちんと働けば金儲けができて、家族を養ってゆける。それ以上を、この国

ルは共通なのだ、と主張する。そこから話題は、おのずとテレビの「おしん」に逸れてゆく。あの放映があったときには、本当に皆が夢中になって見た。キリスト教徒もイスラム教徒も。放映の時間には、市場ももぬけの空になったものだ。あの頃はよかった。酒？そりゃ昔はよく呑んだ。自分はキリスト教徒だから、酒は飲んでもいい。だが飲むとついでを過ぎ、自制を失って愚かな諍いをこすのが、人間というものだ(このあたり、イスラム教徒の言い分に近い)。でも、自分も年をとった。今ではクリスマスのお祭りのときに、ちよつと嗜む程度。だって、子供たちに模範を示さねばならないだろう。ドイツ社会では、子供は親に反抗し、親は離婚し、誰が誰の子供か分からない。そんな不道徳に、自分の子供が染まっていたは大変だ。家族を大切に、それが人倫の根本というものだ。違うかね？

三カ月をドイツで過ごして、結局一番豊かで真実な会話を持てたのは、こうしたゆきずりの亡命滞在者との、とりとめもない遣り取りのなかでのことだった。もちろんそこに、自分たちを受け入れず、あくまで季節労働者としてしか遇しない異郷への、感情的な反感はある。これらなりの世界観も、釣り合いが取れたもの、というよりは、あくまで自分たちの生存の軌跡から割り出されてきた、極度に主観的で、一方的な価値判断に過ぎないかもしれない。だが、そんな、日常の「出来事」に、学問の世界へと整序されてしまうと、もはや見えなくなつて

しまう、より「生」で切実な叫びを見ないわけにはゆくまい——そこにこそ「生な真実」がある、などといった早急な思い込みは、これを慎重に排除せねばならぬにしても。それにしても、この隔たりは何なのだろう。「移動の自由」のある我が身と、「移動を強いられた」彼らと。「逃れる自由」を享受できる者と、「亡命を宣告された」人々と。そうした対極をなす境涯を生きる者どうしが、つかの間とはいえ、席を同じくして言葉を交わす。故郷を奪われ、意志に反した漂流のなかで、しかも決して安住を許されない外国の法秩序としたたかに渡り合いながら、国家への幻想の彼方で、家族を養ってゆく人々。そんなありふれた現実に触れるために、自分は日本列島をしばし留守にしたのだろうか。同様の現実が、日本という国のなかで、いかに抑圧され、目に触れない暗部へと押しやられていることか。故郷にあれ異郷にあれ、生存への違和感、存在の居心地の悪さが、年とともにいやましに募り来る。